

# 短歌を読んで自分のことばを紡ぐ 話し合い活動とリライトを通して

長崎県佐世保市立江迎中学校 諸藤 智一

## はじめに

三十一音に凝縮されたことばの中に込められた作者の思いは深く、時にはしみじみと、時には激しく私たちの心を揺さぶる。だからこそ読み手はことばに委ねられた意味を一つ一つひもとく努力が必要とされる。

生徒が、短歌を読み込み、そのよさを体感できる方法はないものだろうか。

そこで今回、話し合い活動を通じた、短歌のことばに立ち返り、自分のことばを紡ぎ出す読みの授業に取り組んだ。

## 1 ことばの抽出・再構成・対照化

授業の最初の課題である。

「短歌で『作者が伝えたかったこと』を作文にしよう。」

まず、作者が今いる場所や時間、季節、登場する「もの」や「人」を明記させた。

生徒はことばを一つ一つ整理し、ノートに書き込んでいく。短歌の中に登場する「もの」・「人」は書いてあるからわかる。しかし、その後である。皆、頭を抱えている。

ここでは斎藤茂吉の「みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただに急げる」を例に挙げる。「もうすぐ亡くなる母の姿を見たい」ことはわかる。しかし、作者は今、どこにいて、何をしているのかわからない。

短歌は短いことばで構成されているがゆえに、中学生にとっては、場面を想起し、作者の思いを読みとることはなかなか難しいようだ。そこで、次のような指導を行う。

- ① 「抽出」したことばを「再構成」したり「対照化」すること。
- ② 必要に応じて「補足」すること。

生徒は、

場所	「みちのく（山形県）」
時間	「夜」
登場人物	「母（死）」・「急ぐ作者」

ということばを抽出していた。そこで、次の課題を与える。

課題(1)	「みちのく」の母に会いに行くのであれば、作者は「どこ」にいる？
課題(2)	どんな手段で会いに行っている？

ここから、生徒の話し合い活動によるそのことばの再構成と対照化が始まる。

(1)・(2)については、あまり時間を要しなかった。「作者は『みちのく』からはずっと離れた場所（例えば東京）にいたはずだ。」

「だったら、汽車に乗ってるよ。」  
ただ、「急いでいる」とはどういう意味なのか、生徒のことばが詰まる。

## 2 つとばの「補足」と作品の追体験

そこで、これまで作品を客観的に見ていた生徒に、作品のつとばの中に隠れているものを紡ぎ出すための課題を与える。補足の読みである。このことによって、生徒は客観的な読みを離陸して、作品の中に入り込み、作者の追体験をすることになる。

「ただにいそげる」が、生徒が一番思いあぐねることばのようだ。生徒は、何らかの手段で急いで移動していることを伝えていることばと解釈する。そこで、最後に補足の課題を示す。

課題(3)「急いでいる」ものは何？

「何が」「急いで」「いる」？

当時、一番早い交通手段は汽車である。そんな汽車に乗っているながら「急いでいる」とは作者のどんな状況を表しているのか。

生徒の中で、少しずつ短歌のことばからの紡ぎ出しが始まる。

どんな事情があるにせよ、汽車の速度は一定である。そうならば、急いでいるのは汽車ではなく、自分の気持ちなのではないか、と生徒は気づく。「母の限りある命に会いに行く」ため汽車に飛び乗ったものの、その不安や緊張、作者の焦りはますます募っている。

その気持ちの状態を表現したのではないかと。客車の椅子に座っているのではなく、出口のドアの前で、このドアが開くのはまだかまだかと待っているのではと解釈する生徒もいる。作者の短歌に込めたことばが少しずつ、生徒の心にしみていくのを実感した。

## 3 作品のリライト

最後に次の課題を与えた。

「斎藤茂吉が、この短歌を作文にしたとしよう。どんな文章を書くだろう。君たちが茂吉になりにかわって二百字前後で書いてごらん。」

短歌から、「ことば」の意味を紡ぎ出した彼らは、黙々と書き始めた。その筆が、なぜか止まらない。二百字詰原稿用紙の余白まで書く生徒や、授業が終わっても、まだ書いている生徒がいた。休み時間には、書いた作品を読み合う姿も見られた。そして、すべての生徒が作品を書きあげたのだった。

次に生徒の作品を挙げる。作品のことば一つ一つをひもとき、そこから作者の思いを紡ぎ出した結果である。

### 作品1

僕は汽車の窓を見つめながら、内心とても焦っていた。早く、早く着いてくれ！

僕は何度も心の中で叫んでいた。駅を通り過ぎるたびにいらだちも募る一方だ。あと五駅、あと三駅……。僕は汽車の出口の前に立ち、今か今かとドアの開くのを待っている。

### 作品2

私は急いでいる。焦りと不安で汗だらけの手。電車の音と共に、私の鼓動も大きく、速くなる。母のことを思えばなおさら、じんわりとした汗が、私のほおを伝う。ああ、早く、もっと早く！母が生きているうちに、列車のドアよ、早く開いてくれ！。

## おわりに

作品を読み味わう方法は様々である。ただ、何度も「ことば」に立ち返り、そこから見え隠れする「ことば」の持つ力、そしてそこに込められた作者の思いを探究できる生徒を一人でも多く育てたい。その力がひいては、生徒の生きたことばとして日常生活の中で活用されることを願ってやまない。——とてもシンプルに。より深く。

もろふじ ともかず 生徒の伝え合い学習と課題解決学習を中心に据えた国語の授業を展開中。「わかった」と言える生徒を一人でも多くしたいと思つ毎日です。